

現代日本語における頻度副詞に関する一考察  
—高頻度副詞を中心に—

台湾・淡江大学  
江雯薰

1. はじめに

現代日本語には、「たえず」「しじゅう」「しょっちゅう」「よく」(以下では四語と称する)のような頻度を表す副詞がある。これらは、辞書類からの説明をみると、『日本国語大辞典(第二版)』(2002)では、次のように述べられている。

「たえず」：〔連語〕(動詞「絶える」の未然形に助動詞「ず」の連用形が付いたもの。後世は副詞として扱う)ある動作が止むことなくひき続いて行なわれているさま。常に。いつも。間断なく。

「しじゅう」：〔副〕始めから終わりまで。また、ある動作が頻繁に行われるさまを表わす。たえず。常に。

「しょっちゅう」：〔副〕(「しょちゅう(初中)」の変化した語か)始終。いつも。常に。絶えず。しょちゅう。

「よく」：〔副〕(形容詞「よい」の連用形から)たびたび。ともすれば。しばしば。ちょくちょく。まま。

以上の説明から、四語は出来事が頻繁に、または間断なく行われるさまを表す、つまり高頻度を表すという点で共通していると言える。また、これらは構文的な特徴ではなく、四語の意味的な特徴を説明すると思われる。本発表は、四語を高頻度を持つ副詞<sup>1</sup>とし、それぞれの構文的な特徴を明らかにすることを目的としている。

2. 先行研究

先行研究について、管見の限りでは個々の副詞について述べているのは森田(1989)と飛田・浅田(1994)であり<sup>2</sup>、高頻度副詞全体の特徴について述べているのは仁田(2002)である。

森田(1989)は、「しじゅう」「しょっちゅう」について、「両語とも動作性の語に係り、状態を修飾することはあまりない。静止状態「彼女はしじゅう美しい」などとはあまり言わない。しかし、特殊な例として、動きや変化を前提とした状態「私はしょっちゅう忙しい」「私はしょっちゅうこわいんです」「彼はしょっちゅう暇がない」などがある」とし、また「「しじゅう／しょっちゅう」は連続行為・作用を表すというより、同じ行為・作用が頻繁に間欠的に繰り返される状態である。その点では「しじゅう」のほうが「しょっちゅう」より連続性が濃い」ともしている。

「たえず」について、「これは動作・作用が間断なく続いているさま。状態を表す語や、否定の表現には係らない」としている。

「よく」について、「十分に行うことは、その時の行為の完全さとともに、同じ行為を繰り返し何度もおこなう頻繁さともなる。「よく噛む」ことは「十分に噛む」ことであり、「何度も噛む」ことでもある。繰り返すことによって完全さが成し遂げられる行為や作用・現象などの場合、「よく」は「何回も」「幾度も」の意味を強める」としている。

仁田(2002)は、「たえず」「しじゅう」「しょっちゅう」「よく」について、「これらの頻度の副詞は、いずれも、事態が高頻度に繰り返され反復することを表している。高頻度を表す「タエズ」「シジュウ」「ショツチュウ」「ヨク」の中にあつて、「タエズ」は少し異なつたところを有している」としている。

<sup>1</sup>仁田(2002)では、頻度副詞については、「いつも」「常に」の類、「しょっちゅう」のように高頻度を表すものの、「たびたび」のように中頻度を表すもの、「まれ」のように低頻度を表すものに分けられている。

<sup>2</sup>四語についての記述は飛田・浅田(1994)もあるが、内容的にはほぼ同じであるので森田(1989)を代表として取り上げた。

今までの研究では、『日本国語大辞典(第二版)』(2002)のように、主に四語の意味的な違いを説明し、構文的な違いはあまり述べられていないと言える。本発表では、時間的限定性の有無、文末の述語における特徴、文全体が実現しているかどうか、否定文と呼応できるかどうか、程度副詞と共起できるかどうか、話し手の評価といった観点から構文的に四語を考察する。

### 3. 時間的限定性の有無について

時間的限定性の有無という観点からみると、四語のいずれも制約されていない。次の(1)は時間的限定性がない場合であるが、(2)は時間的限定性がある場合である。

- (1)a. 人間は不完全だから絶えず失敗を繰り返します。(川の流れのように)
- b. 酔っぱらいは始終問題を起こす。(ロング・グッドバイ)
- c. 戦争はしょっちゅう人々にありとあらゆる不幸をもたらす。(スイス銀行の陰謀)
- d. トウェンティフォー・セブン。英語では、片時も離れない恋人同士が、この言葉をよく使う。一日に二十四時間、一週間に七日間。あなたと一緒にいたい。(24.7)

(2)○彼女は{たえず／しじゅう／しょっちゅう／よく} 学校に文句を言う。(作例)

(1a)は「人間」、(1b)は「酔っぱらい」、(1c)は「戦争」、(1d)は「片時も離れない恋人同士」という一般主体の性格・特性を表す文である。それぞれは、話し手の過去の経験から一般論を述べる文である。それに対して、(2)は「彼女」という個別主体の一時的な状態を表す例である。

(1)(2)が非文とならないということから、四語のいずれも一般主体で一般論を述べる場合にも、個別主体で一時的な状態を述べる場合にも用いられると言える。つまり、時間的限定性に制約されていないことがわかる。

### 4. 文末の述語の特徴について

四語の文末にくる述語をみると、「運動性」「限界性」を持つことが重要である。ただ、「たえず」「しじゅう」はそれに加えて、「状態性」を持つ述語もくることができる。

まず、状態や存在を表す動詞を見る。

- (3)a. 街角に、ラジオに、テレビに(とくに夕方)と、どこにでも絶えず政治家がいる。(なんだこりゃ! フランス人)
- b. 主人は五十過ぎぐらいの男で、始終家にいた。(白い)
- c. 近頃、授業中メールする学生がしょっちゅういる。(作例)
- d. 「おれはいろいろと考えたんだけど、昔はばあやつきの大学生というのはよくいた。…(中略)…」(太郎)
- (4)a. 夕霧はそれを哀れと見ながら、宮のこともたえず心の片すみにある。(新源氏)
- b. 日に七万遍となえたことも始終ある。(親鸞)
- c. 確かに、そんな気がするものがしょっちゅうある。(バリ)
- d. 長子よりも下の子が気に入っている場合はよくある。(乱雲)

「いる」は、(3a)(3c)(3d)では「見られる」と解釈できるが、(3b)では「存在」や「状態」を表す。また、「ある」は、(4b)(4c)(4d)では「起こる」と解釈できるが、(4a)では「存在」や「状態」を表す。(3)(4)から、「状態性」を持つ述語は「しじゅう」「たえず」の文末にはくることができるが、「しょっちゅう」「よく」の文末にはくることができないと言える。

次に、動作や変化を表す動詞を見る。

- (5)○彼女は両親の面倒を見るために{たえず／しじゅう／しょっちゅう／よく} 実家に帰る。(作例)

(6)○この会社のホームページは{たえず／しじゅう／しょっちゅう／よく} 変わる。(作例)

(5)の「帰る」は動作を、(6)の「変わる」は変化を表す動詞であり、どちらも「運動性」を持つ動詞である。(5)(6)のように「運動性」を持つ述語が四語の文末にくることができる、ということから、「運動性」は四語にとっては重要であると言える。

- (7)\*子供は{たえず／しじゅう／しょっちゅう／よく} 遊ぶ。(作例)

- (8)\*彼は{たえず／しじゅう／しょっちゅう／よく} 走る。(作例)

(7)の「遊ぶ」と(8)の「走る」は「限界性」を持たない動詞であり、四語と共起すると、非文となる。もし、「毎日公園で」のような補語を二文に入れるなら、許容度が高くなる。それは、「毎日公園で」が「遊ぶ」「走る」という動作に「限界性」を与えるからである。また、

(9)\*彼女は{たえず／しじゅう／しょっちゅう／よく}田舎に住む。(作例)

(10)○彼女は{たえず／しじゅう／しょっちゅう／よく}ホテルに泊まる。(作例)

「住む」は「長期間ある場所に居住する」ことを表し、(9)のように四語と共起すると、非文となる。それは、「住む」の「長期間居住する」という意味が、四語の表す頻度の高さと相容れないからである。もし、(10)のように「泊まる」なら、「旅先・外出先・勤務先などで夜を過ごす」ということになり、「限界性」を持つので、「住む」より許容度が高くなる。

このように見ると、「運動性」「限界性」は四語の文末の述語には重要であり、また「状態性」を持つ述語は「たえず」「しじゅう」の文末にもくることができると言える。

## 5. 文全体が実現した事態を表すかどうかについて

四語を用いる文全体は実現した事態を表さなければならない。

(11)○彼はトイレを{たえず／しじゅう／しょっちゅう／よく}掃除していた。(作例)

(12)○彼はトイレを{たえず／しじゅう／しょっちゅう／よく}掃除する。(作例)

(11)の「掃除していた」は、過去において一定時間何度も掃除していたことを表す。四語と共起すると、いずれも実現した事態を表す。また、(12)のように未来の時点においても実現する確信がある場合にも用いられる。このことから、四語を用いる文全体が実現した事態を表すと言える。それは、事態が実現しないと、四語の表す頻度の高さを際立たせないからである。

## 6. 否定文と呼応できるかどうかについて

否定文は、「たえず」「しじゅう」とは呼応できるが、「しょっちゅう」「よく」とは呼応できない。

(13)園子は笑いをたえず忘れたかった。(孤高)

(14)さいわい、あたりは漆を溶いたような五月闇だったし、当麻は始終ひと言も声を立てな  
かった。(翡翠)

(15)\*機械音痴なので、パソコンはよく使わない。(作例)

(16)\*海外旅行はしょっちゅう行かなかった。(作例)

(13)は「いつも笑っていた」を、(14)は「ずっと黙っていた」を意味し、いずれもある動作が続いているさまを表す。「たえず」「しじゅう」が否定文と呼応できるのは、ある動作が途切れなく、ひき続いて行なわれているさまを表すからである。それに対して、(15)(16)のように「しょっちゅう」「よく」が否定文と呼応できないのは、同じ動作や行為を繰り返して何度も行うさまを表すからである。これらは否定的に表現すると、「あまり使わない」「あまり行かなかった」のように用いられる<sup>3</sup>。つまり、否定文と呼応できるかどうかは四語の語彙的な意味と関わっている。

## 7. 程度副詞との共起について

程度副詞との共起について、高頻度副詞が程度副詞の外側にある場合と、内側にある場合とがある。以下では、「非常に」を代表として取り上げるが、高頻度副詞が程度副詞の外側にある場合は、「\*よく非常に」「\*しょっちゅう非常に」「\*たえず非常に」「\*しじゅう非常に」のように、用いることはできない。それに対して、高頻度副詞が程度副詞の内側にあると、「\*非

<sup>3</sup>「しょっちゅう」が否定文と呼応できる場合は、次の(1)のように「そんなに」のような語と共起するのである。

(1)父がふいに言った。「え？そんな、クラブにも入ってないのにコンパなんてそんなにしょっちゅう  
ないわよ。…(後略)…」(つぐみ)

「そんなに」は打ち消しの語を伴って、「程度が思ったほどでないさま」を表し、「しょっちゅう」の表す頻度の高さを限定するのである。

常にたえず」「\*非常にしじゅう」は用いられないが、(17)のように「非常にしょっちゅう」「非常によく」は用いられる。このことは仁田(2002)でも述べられている<sup>4</sup>。

(17) この地方は非常に{△しょっちゅう／○よく}台風が来る。(作例)

(17)では、程度の甚だしさを表す「非常に」は「しょっちゅう」より「よく」のほうが共起しやすいと思われる。「非常に」は「よく」と共起すると、「よく」が表す頻繁さの程度を強調することができるが、「しょっちゅう」の場合は際立たない。このことから、「しょっちゅう」が表す頻度の高さは「よく」より高いと言える。

ところで、「非常にしょっちゅう」「非常によく」を構文的に考察すると、「運動性」「限界性」は文末における述語にとっては重要である。

(18) この会社では無断欠勤をする社員が非常に{△しょっちゅう／○よく}いる。(作例)

(19) この中学校では苛めは非常に{△しょっちゅう／○よく}ある。(作例)

(18)の「いる」は存在を表し、「状態性」を持つものであるが、「この会社では無断欠勤をするケースが非常に{しょっちゅう／よく}見られる」と解釈できるので、非文とならない。一方、「ある」は「状態性」を持つ静態動詞であるが、(19)のように「起こる」と解釈でき、「運動性」<sup>5</sup>をもつ場合もある。「いる」「ある」は「状態性」を持つ述語であるが、「運動性」を持つと解釈できる。また、「運動性」を持つ述語が文末にくる場合をみると、

(20) 彼女はドラマに非常に{△しょっちゅう／○よく}出演する。(作例)

(21) 彼女は意見が非常に{△しょっちゅう／○よく}変わる。(作例)

(20)の「出演する」は動作を、(21)の「変わる」は変化を表し、いずれも「運動性」を持つ動詞である。このような動詞が文末にくることができる、ということから、「運動性」は「非常にしょっちゅう」「非常によく」の文末の述語にとっては重要な要素の一つであると言える。ただし、次の(22)のように「運動性」を持っても非文になる場合がある。

(22) \*彼は非常に{△しょっちゅう／○よく}田舎に住む。(作例)

(22)の「住む」は「ある家や場所で長期間生活する」ことを表し、「運動性」が希薄である<sup>6</sup>。また、その長期間居住している状態には「限界性」はない。(22)が非文となることから、各副詞を用いる文には「運動性」だけでなく、「限界性」も必要であると言える。

以上から「運動性」「限界性」は「非常にしょっちゅう」「非常によく」の文末の述語にとっては重要であると言える。

## 8. 話し手の評価について

四語のつく文での話し手の評価について、プラス評価の場合、マイナス評価の場合、プラスでもマイナスでもない場合に分けて、実例数全体を分析すると、次の<表1>になる。

<表1>データを取った資料による評価について

	プラスの場合	マイナスの場合	プラスでも マイナスでもない場合	実例数
たえず	91 例(全体の 28%)	89 例(全体の 27.38%)	145 例(全体の 44.62%)	325 例
しじゅう	1 例(全体の 0.81%)	53 例(全体の 42.74%)	70 例(全体の 56.45%)	124 例
しょっちゅう	9 例(全体の 3.14%)	155 例(全体の 54.20%)	122 例(全体の 42.66%)	286 例
よく	2 例(全体の 0.72%)	37 例(全体の 13.41%)	237 例(全体の 85.87%)	276 例

<表1>から、「しじゅう」「しょっちゅう」は「たえず」「よく」よりマイナス評価を表す例が多いこと、またプラスでもマイナスでもない場合には「よく」は他の3語より多く用いられ

<sup>4</sup>仁田(2002)では、「高頻度も低頻度も、程度の極端なものであった。極端であることにより、程度の副詞によって、その程度性を際立たせることが、自然でありかつ効果を持つことになる。(P289)」と述べられている。

<sup>5</sup>「運動性」とは出来事や事態が動作や変化をしている様子を表すことをいう。

<sup>6</sup>「住む」のような動詞は動作動詞に属するが、長期間の状態を表すもので、「走る」「読む」のような実際の動作を表す動作動詞よりも「運動性」が希薄である。

ることが見られる。このようにみると、「しじゅう」「しょっちゅう」は「たえず」「よく」よりマイナス的に用いられると考えられる。

## 9. おわりに

これまで考察してきたことから、四語のいずれも時間的限定性に制約されていないこと、「運動性」「限界性」は四語の文末の述語にとっては重要であること、四語のいずれも実現した事態を表すことで共通している。それに対して、「状態性」を持つ述語は「たえず」「しじゅう」の文末にもくることができること、「たえず」「しじゅう」は否定文と呼応できること、「しょっちゅう」「よく」は程度副詞と共起できること、「しじゅう」「しょっちゅう」はマイナス評価的に用いられることで異なっている。このようにみると、高頻度副詞には「たえず」「しじゅう」のように行為を間断なく継続しているものもあれば、「しょっちゅう」「よく」のように同じ行為を繰り返し何度も行うものもあると言える。

## 参考文献

- 久米稔(1968)「頻度をあらわす副詞の意味の測定」、『早稲田大学語学教育研究所紀要』7。  
工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』、ひつじ書房。  
———(2002)「現象と本質—方言の文法と標準語の文法」、『日本語文法』2巻2号。  
国立国語研究所(1991)『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』、大蔵省印刷局。  
小学館国語辞典編集部(2002)『日本国語大辞典(第二版)』、小学館。  
仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房。  
———(2002)『副詞的表現の諸相』、くろしお出版。  
飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』、東京堂出版。  
森田良行(1989)『基礎日本語辞典』、角川書店。  
矢澤真人(1986)「反復の連用修飾成分——「動詞句の素性と反復表現の構文論的考察」試論——」、『学習院女子短期大学国語国文論集』第15号。  
———(1987)「頻度と連続——連用修飾成分の被修飾単位について——」、『学習院女子短期大学紀要』25。  
———(2000)「副詞的修飾の諸相」、仁田義雄・村木信次郎・柴谷方良・矢澤真人『日本語の文法1 文の骨格』、岩波書店。

**使用テキスト** (本文中で「作例」と注記した例はネイティブによるものである。)

孤高＝新田次郎『孤高の人』(CD-ROM版新潮文庫の100冊)新潮社(1995)、白い＝赤川次郎『白い獰』(光文社文庫)光文社(1987)、新源氏＝田辺聖子『新源氏物語』(CD-ROM版新潮文庫の100冊)新潮社(1995)、太郎＝曾野綾子『太郎物語』、24・7＝山田詠美『24・7』(幻冬舎文庫)幻冬舎(1998)、翡翠＝杉本苑子『海の翡翠』(角川文庫)角川書店(1989)、乱雲＝松本清張『乱雲』(中公文庫)中央公論社(1984)。それ以外の例は『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ:Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)』で検索したものである。

〈付記〉 本発表は2012年度日本住友財団研究助成の成果の一部である。